

---

# 魔剣とところにより鞘

白金千乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔剣とことにより鞘

### 【Nコード】

N1064X

### 【作者名】

白金千乃

### 【あらすじ】

勇者達から少し離れた物語。

目つきと態度の悪い”最凶”の魔剣と、喋れないけど齒に衣着せない鞘。そんな二人の、”生きること”を探す為の、物語。

\*不定期更新

## 魔剣、鞘をひろう

「貴様、”魔剣”だな」

多くの人影に囲まれ、さながら有名人の様な状態。

囲まれた本人、もとい”剣”は、面倒くさげにため息を吐いた。

(……………またか)

あたりに倒れた人の山を見つめ、声には出さずに心で呟く。

最強の魔剣として創られた彼が、そう簡単につかまるはずなど無いのに。

それでも懲りずに、こうやって何度も訪れる者たち。

その目的は、力を利用する為だったり、彼を”消す”為であったり。

(しかし面倒だな……………あの”勇者”にでも手伝わせるか?…

…いや、そのほうが面倒か……………)

一瞬浮かべた姿を瞬時にかき消す。

頼めば引き受けてくれるだろうが、その過程が面倒になるだろう。

(とりあえず、一旦何処かの街にはいるか)  
『あの』

あたりには殺風景な光景が広がるばかり。  
しかし、記憶の限りではこの近くに街が一つあったはずである。

軽くため息を吐きながら、その足を動かし始める。

(金は……まあ、飯代くらいはあるか)  
『おい』

地図は無いが、方向は覚えている。

方向感覚が間違っていなければ、暗くなる前には着けるだろう。

う。

(さて、その後はどうするか……)  
『やっほー』

ぴたり、と足をとめて。

声の聞こえたやや後ろを振り返ってみる。

『あ、どうも私サヤと申しますが、魔剣さんでしょうか』  
「……………は？」

見落としていた小さな少女は、軽く手をあげてさっぱりと挨拶をした。

「…………おい」

『あのオムライス、非常においしそうですね』  
「おい」

定食屋の前で、涎まではたらしていないもののもの欲しげな顔で見つめる少女。

その少女に服の裾を捕まれた”最強の魔剣”は、怒りと呆れの混ざった声で唸った。

「…………で、お前は何なんだ」

『はい、サヤです』

「名前じゃねえよ」

オムライスをほおぼる少女をテーブルの向かいでにらみながら、魔剣はため息を吐く。

先程から同じ事を何度か繰り返しては、同じようにため息を吐いている。

『ため息はシアワセが逃げるんですよ？』

「誰の所為だ誰の」

もうこのまま金を払わずに置いていこうか。

魔剣はそろそろそう考え始めていた。

少女が、魔剣のことを知っていなければ、の話だが。

そもそも、あの場で魔剣といわれなければ、街までつれてきたりしない。

ふと思いつき、魔剣は質問を変えた。

「……お前は何の目的で俺に接触してきたんだ」

オムライスを食べていた手が止まる。

スプーンを置いて、少女は口の周りを吹いた。

『……目的は、特にないです』

「は？」

『しいて言うなら、貴方のそばにいますこと、ですね』

「……………は？」

『貴方は”剣”で、先程から言ってるように、私は”鞘”<sup>サヤ</sup>”で  
すから』

彼女の言葉の意味を理解して、彼は啞然とした。

『どうしてお前が人型に創られたのか、わかるかい？』

『わかりません』

『そうか』

その言葉の意味は、今でもわからなかったけど。

その時、浮かべた笑顔が少し寂しそうだということは、わかった。

『……お前が作られた目的は』

『魔剣に対する制御装置としての役割を担う為です』

『そうだ、魔剣だ』

『お前は、魔剣の側にいるために、生まれきた創られたんだ』

『私が創られていたのは、あなたとは別の研究所でしたから。知らなくても無理は無いですね』

「……つまり、俺の暴走を防ぐ為に創られてたってわけか」

既に暴走はしたので、無意味なことになってしまったが。

恐らく、自分が暴走した際に彼女も抜け出したのだろう、と魔剣は思った。

そして、目的であった”魔剣”の記憶だけを頼りに、やって来たのだ、と。

自分が、”勇者”を追っていたように。

『というわけで、ようやく見つけたわけですよ』

いつの間にか食べきっていたオムライスの皿にスプーンを置いて、少女は水を飲んでいた。

因みに、水を飲みながら声を発しているのは、彼女が実際に”喋る”事をしていないから。

どうやら喋ることはできないらしく、念話の様なもので直接語りかけているようだった。

魔剣は、ただその様子を暫く見ていた。

が。

「……じゃあここ最近追っ手が増えてきてたのは」

『……私の所為も在りますね、私も追われる身ですから』  
「てめえこの野郎！」

後ろ手に窓ガラスを割りながら叫ぶ。

周りの客や店員は驚いていたが、少女は微動だにせず水を飲みほした。

魔剣は立ち上がると、少女を掴みその窓から飛び出した。

それに慌てたのは店員、ではなく。

「ちっ待て!!！」



「追え!!」

待ち構えていた、追っ手だった。

どうやら、店の周りを囲まれていたらしい。

(街中で騒がれても面倒だな、くそっ)

『無銭飲食ですよ』

「うるせえ、大体食ったのでめえだろうが!!」

走る二人の前に、数人の人だかりが立ちはだかった。

その手には、明らかに刃物を持って。

「ちっ、面倒くせえが突破するしか……」

『なら私が』

「はっ!?おい!!」

『鞘の役割は魔剣の制御、そして、魔剣を”守ること”です

から』

それまで魔剣の後ろを走っていた少女は、その前に踊りでる。

そこへ、追っ手のはなった剣が一齐に振り下ろされた。

ガキン

目の前に起きた光景を、魔剣はただ見た。

走っていた足を止めて、怒鳴っていた口をあけたまま。

立っているのは少女。  
倒れているのは追っ手。

かわしたわけではない。

振り下ろされた剣は、全て少女にぶつかった。

そして、攻撃したわけでもない。

ただ、反動を受けて、追っ手は飛ばされて倒れただけ。

剣が勝手に、少女を攻撃するのを止めたのだ。

それはできない、とでも言うかのように。

『さあ、今です』

「あ、おい………」

街の外まで走りぬけ、ようやく二人は足を止めた。

『もう大丈夫でしょう、たぶん』

「おい」

『あ、たぶんとつけたのはもし追ってきた場合私の所為になるのがいやだからで』

「そうじゃねえよ！」

頭を軽くはたいて、少女の言葉を止める。

「お前、何なんだ!？」

『ですから、鞘ですけど』

「そうじゃねえ」

『……だから』

『鞘、だからですよ』

魔剣の暴走を防ぐ為に創られたのは、全ての剣を”治める”

鞘。

どんなに強い剣であろうと、刃を持つ限り鞘にはかなわない。

『つまりは、剣であれば私に傷一つつけられません』

「……なるほどな」

振り下ろしてみた刃を引<sup>う</sup>つ込めながら。

納得して魔剣は呟いた。

『……さすがにいきなり試されてもびっくりしませんが』

「確認だ」

魔剣は少女を見下ろす。

外見こそ、普通の少女と何ら違いなど無かった。

「……同じ、か」

『?何かおっしゃりましたか』

「何でもねえ。……で、名前は」

『はい?』

「お前の名前だ。研究名でもなんでもいい。鞘なんてありきたりな呼び方できるか」

そんなにとつ捕まりたいのか、と頭を小突かれ、少女は暫く考え込むように下を向いて。

そして、見上げる。

『シャシャです。私は何と呼べば?』

「……クラウドだ」

『ではクラウドさん、よろしくお願いします』

よじやぐ、剣と鞘は巡りあう。

## 鞘、迷子をひろう

『あの雲、さつきも見ましたね』

「雲なんてどれも同じだろ」

『そうですか？あつちのははじめましてな気がしますよ』

「何だそりゃ」

『哲学です。雲はまるでヒトの生きる様にも感じません

か？』

「は？」

『つかめなくて、雨を降らすと消えてしまい、また生まれて』

『わたがし』

「お前腹減っただけだろ」

二人は”切り取られた”青い空を、”底”から見上げていた。

何故この様な状況になったのかは、離せば長くなるのだが。  
要約すると、”追いかけて落ちて落ちた”。

「ったく……しつこい上に面倒な事にしやがって……」

『久しぶりに本気で追いかけられたので、ついはいでしまいましたね』

「それで崖に落ちるとか無いだろ……てか、はいでたのか」

『はい、それはもう、ひゃっほーいと』

表情はそのままに腕でそのはしゃぎぶりをシャシャは表現してみせた。

それを見てクラウドは大きくため息を吐く。

「……そろそろ動いてもよさそうだな」

そう言つて、あたりの気配を探る。

何も、ただ崖の下でじっとしていたわけではない。

落ちたことを利用して、追っ手から逃れることも考えていたのだ。

もちろん、結果論ではあるのだが。

「つと」

立ち上がり、体についた土を払う。

周囲の土がやわらかめであるのも、一つの救いだつた。

もちろん、二人とも崖から落ちたくらいではどうと言つことも無いのだが。

「おい、そろそろ行くぞ」

『……………』

「おい」

『何か、聞こえませんか』

「は？」

いわれて耳を済ませる。  
特に物音は無い。

「……何もきこえねえぞ」  
『……………いえ、これは』

どこか懐かしむように眼を細めて、シャシャは呟いた。

「また行き止まりか……………」  
「くそ……………後は外にでるだけなのに……………」

辺りを照らすのは最低限の明りのみ。  
その暗さだけで、思わずひるんでしまっほど。  
幼い子供二人にはとてつもなく怖い場所だった。

「にいちゃん……………」  
「……………」

袖口を泣きそうな顔でつかまれ、少年はぐつと唇をかみ締め  
る。

自分は兄なのだから、弟を守らなくてはならない。

だから、不安を出してはいけない。

こつり

こつり

「！！」

「誰だ……！？」

聞こえてきた足音らしき物音に、びくりと体を震わして。身を寄せ合い、身構える。

こつり

「……ただの人間のガキじゃねえかよ」

『……？おかしいですね……』

「ひ……人……？」

「……」

久しぶりに見た人の姿に、二人はただ啞然としていた。

対して相手の男女は、どこか期待はずれの様な表情を浮かべ

て。

はっとして、少年が口を開く。

「な、何だお前達！？」

「お前らが何だったの」

『このような場所でどうしたのですか？』



「あ……えっと……」

危険ですよ、と言う女に、幼い方の少年が口ごもる。  
かばうように前に出て、兄である少年が答えた。

「何だっついていいだろ！」

『それもそうですね』

あっさりと言ったに彼女にやや調子を狂わされながら。  
後ろの男が欠伸をしながら続ける。

「どおでもいいが、こんな所に居やがると、そのうち食われ  
ちまっせ?」

「え……」

後ろを指差され、少年達は恐る恐る振り返る。  
大きな瞳が、ぎょろりと動いて眼があつた。

「うわあああ!?!?」

「まままま魔物!?!?」

少年達は驚き、思わず尻餅。

そこへ土から半身を出している魔物は、その大きな爪をつけた手を振り上げた。

ガキン

「っ!」

「随分でけえモグラだな……おい」

振りかざされた爪を”腕”で受け止めて。  
男はち、と舌打ちをした。

『もぐらたたきには不向きですね。こちららも打撃ではなく刃  
ですし』

「打撃……」

子供達を引っ張って離れた女の言葉に、男は何かを考えたの  
か呟いた。

そして。

ごん

「こづいことか？」

『……少し違う気もしますが』

”素手”で魔物を殴りつけた男に、女は表情を変えないもの  
の呆れたように呟く。

”素手”、といっても彼の場合は”武器”となり得るもので  
はあるが。

それを知っていても驚く光景を、知らない少年達は驚きの眼  
差しで見っていた。

『……大丈夫？』

「あ、はい！ありがとうございます！」

「……ありがとう」

『気にしないでください、あの方自分がむしゃくしゃしてた  
だけですから』

「……やっぱり何もなさそうだな……おい、さっさと出るぞ」

『あ、はい』

「え!？」

少年があげた声に、二人は振り向く。

『どうしたの?』

「あ、えっと、僕達実は迷ってて……出口まで一緒に行つてもいいですか!？」

「おい!？」

「にいちゃんだって早く帰りたいでしょ!？それに、あんな魔物……」

そこから先は黙ってしまったが、恐らくは怯えているのだろう。

それに気づき、兄である少年も押し黙る。

「迷子かよ……」

『「一緒にしましょう、ここに居たら危ないです」……ま、いいけど」

受けようと断ろうと特に変わることは無いのだが。

シャシャが乗り気である以上、とめても聞かないだろう。諦めたように男はため息を吐いた。

「あ、ありがとうございます!」

ほっとしてか、弟は少し大きな声でお礼を言った。

兄はまだ思うところがあるのか、黙ったままじっと見るだけで。

女はそれでは、と進みかけて、もう一度足を止める。

『こちらにはクラウドさんです。私はシャシャといます』

「あ、僕はルーイです」

「……………ルカだ」

『それではルカさん、ルーイさん。いきましょう』

シャシャはそう言うと兄弟と並んで歩き出した。

その少し後ろを、気だるそうにクラウドは歩いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1064x/>

---

魔剣ところにより鞘

2011年10月24日01時59分発行